

911.3
ホ
8-9

女
子
之
鑑

八
之
九

香車的文體第八

贊類

律土和讚 奉皇中書町拜見 室川前雙山室川後贊

我松讚 皇帝贊 八頁讚 八頁讚 八頁讚

蚊狂自讚 讚徒然讚

銘類

花桶銘 摺加木銘 著花銘 詠硯銘

古硯銘 不虫銘

木月之盛八

彌陀名号唱之信也二年二得之人懐念也皆云云

仰固心報之思云云折言願不無誠之擬云御名

ヲ并之往生宮殿中二五百歳云云之過云云詔給

狂云此讚建長云云云二種人八十歳御作云云

和讚之帖中ノ要文云云一都大寺云云其云云始云

上ノ但云懐念云云云云云云他カ云云云云云云云云

文云年博藝ノ家ヲ并ニ歌云云云云云云云云云云

本云云云云之法云云云云云云云云云云云云云云

本云云云云之法云云云云云云云云云云云云云云

張之村也土地力ノ因云徳ノ云云云云云云云云云

云云云云之類ノ徳ノ高ノ村云云云云云云云云

卒虎狼子町班員

至重慶

往云此一篇ノ類ノ同ナリ云云云云云云云云云云

Handwritten scribbles at the top of the page.

Handwritten scribbles below the top section.

Handwritten scribbles in the middle section.

Handwritten scribbles in the middle section.

Handwritten scribbles in the middle section.

蓋し用て然も其向ニ云々
古學府ノ体モ似テ
其編ハ井ノ定老ハ在リトフ

六玉川前賢

傳下章

唐の夫を虚らし
輜川の園とあ
りしはらら
ちのらに
いれど
王維うよ

とありあ
多し路下
齊人
と一袖
そひと
言ふ
何れ
其一と
いし

くの時したるれはれの名の共しやゆふたはたはた人さ
しりてあはくくおと人とかちてあつりつりつと
むとつらつえのぬあり新公ウキキ百九子を早とと
えよ井子のむ川を流し山々の雲かたをむむ
まららちむむとまららむむむむむむむむむむ
地のぬおふふてあおあけし北阿の雷の國より
津の國よりあつたまわらきま川ありつらつら
町のむ川を流しと靉布のちらつとほれあつむむ
あり町のむ川を流しあのむむむむむむむむむ
沖朝下をあつ月のむ川ありたの五と川の流

んぞ又海のちらつとつとつとつとつとつとつと
ろむ川あり流をろろろろの奥とて旅人のあつ
ろまらてし川や流はんとと所のあつたむむむむ
しれむ川ありのやんありと流言のまらつあつ
つとつとつとつとつとつとつとつとつとつと
狂云北野見ハミ蘇子カ赤壁ニ效テ前後クマラミニ題セル
但し選場ノ漁筆ト見レシ去ハ前後ハ既見ハ流ハ出童
ニ在リテ前ハ偏ハ違玄ノ法ナンク後等偏ハ頓挫ノ格ナシ
誠ヤ蕉乃ニ去来ハ草アリトハ此等ノ文法ニ頓漸ニ教
ヲ傳ヘタル隨類得解モ又ノ百又ナランカ前ハ仄ニ六川

ノ趣ヲ演ヘテ六趣一貫ノ象水ニ語ヲ結ビ後ハ述ニテ
喜ヲ起シテ跋ノ下ニ早下ノ詞ヲ残セルニ篇ノ趣意ハ
分明ニシテ前篇ハ以テ起結ヲ足ルケ後篇ハ以テ起結
ヲ知ルニ但シテ草ハ尾ノ武士ナリ五年ニ福ヲ得シ
僧トナル心モ堅固ノ道心トシ

我松護

沈之東伍

我々をさへきつる老の森もよもあもはりて一ふきよの
ふりうりうりうりうりあもはりて秋の能なりて舞われ
ふゆとふりうりうりうりあもはりて冬もあもはりて

のふあやちうりうり舞ぬおぬのはれと松とさうふも
あふれと制されらひいさうにめし松とほまね又快
ふりうりうりうりうりうりうりうりうりうりうり
松とさうふもあもはりて冬もあもはりて春もあもはり
云ヒロウト鶺鴒の松を油をさうりうりうりうりうりうりうり
大名の隠者の作さうりうりうりうりうりうりうり
やうりうりうりうりうりうりうりうりうりうりうり
うりうりうりうりうりうりうりうりうりうりうり
うりうりうりうりうりうりうりうりうりうりうり

あれらあへての人此用ひんささるゝ今も藝梅のやうに
と連言の所をいふ用ひのあつては、いふべきの所を
いふに、いふべきの所の用ありて、いふべきの人のさうな
いふに、いふべきの所の用ありて、いふべきの人のさうな
一連作とのらさるゝと云ふこと也

任云此語ハ全ク俳諧ニシテ先ハ我松ニシテ二題ノ意ヲ云ク
去レハ春ノ夜モ秋ノ曉トクテト長短ノ情ヲ二句ニ縮スル筆
力、自在ヲ秘スシテ次ニ天鵝絨ノ松ヨリ大名ノ隱者トハ
名言ニシテ其ノ段ハ一篇ノ筆占ナリカレハ甚ク其ノ雨ノ
詩ヨリ我朝ノ膝松ニシテ十二ニ首ノ故古又古ニシテ用ルニ

膝ノ割リト云ル古人ノ文章ニモ過タラシ景ヲ松ノ山石
カ子ノ詞ニ連言ノ儔ヲ含メスル意ヲ俳諧ノ筆致ニシテ
一連作生ハ文ノ虚實ト知レシ但し作者ハ大野木中ニシテ
別姓ハ佐藤ナルカ加納ノ城下ニ在ナカラシ在字ニ隠故ノ志
アリトク

萬一帝賛

鮎取石川

世ノ神曲辰の像と云ひて、
此の如くは野史云ふ人、
文節林々云々、
人と云ふ人、

かの及皇太后の圖と云ふことにて我々の家なるは、
撰採のまに、
各師の業、
二六三の...
も中...
一...
おなく...
ふ...
う...
う...
そ...

い帝は...の...術...
い...
ある...
あ...
右...
の...
そ...
孟帝の...
あ...
あ...
あ...

狂云此...
論...
此...
此...

ノ掛物ニ對シテ暫クニ白王ノ德ヲ論スニ似テ實ハ極極ノ新
古ヲ云ヘルナリ然レハ登天ノ實有ナル牛鯉ノ靈無ナル
例ニ虛實ノ法アリト稱スレ況ヤ此固ノ或人ニ古未無據
ノ或人ヲ重子テ誠ニ文式ノ論字ニリ曲折深遠ノ体ヲ
尽セリ去レハ作者ハ山田中ナルカ別姓ハ鉦尾ニ濃ノ上者知
ニ任ス世以テ醫術ヲ業トセリ陳思ハ其家ノ領子ニト
但シ上者知ハ順カ和名ニ云元有知ノ里ノ上邑ナリ

合見、讚

鳥落人

たより富りのりせのこはもあちとやんをえ

身のお櫻山にのろれて喰ひて合見子の族とあり
地をゆりての畑にすまふまふのりくたれは
今さらすもせしえあんにきき草のるのりは濃なり抑
ふんとくやふあまとりらるの加し招居のりらと
はうりきうたにのりよといまはれんたれとやれ
ぬの西三首ありとそれを採りかきてききひをうらふ
さうさうの地の記念とありて行くてあまはれ
はらういてその合見子とありてあまはれりりりり
東西とありて伊勢とつくとありてあまはれりりりり
あつれり晴好雨奇のりりありありありあり

洗月の情と比く一て旅をよせしむはとあてに
いづるやるとそのふくらえきく負とそふる
世にまじく負とそふくあてをく神をよまわ
子徳の功と比く一て用と情とあてに
静坐しきしあてに書とぬい出とぬいふに

負讚護

東花坊

世より負を執りて調へるも負を諸々の所
あんと比くをせよあてに書よあてに書
あてに書よあてに書よあてに書よあてに書

比にこれよ世の事とて一筆一軸の如く
釈迦の心と世のおはてしてを食之味の如く
世にまじく負とそふくあてに書よあてに書
あてに書よあてに書よあてに書よあてに書
あてに書よあてに書よあてに書よあてに書
あてに書よあてに書よあてに書よあてに書
あてに書よあてに書よあてに書よあてに書
あてに書よあてに書よあてに書よあてに書
あてに書よあてに書よあてに書よあてに書
あてに書よあてに書よあてに書よあてに書

大明寺

かんららえり此きものしんはねらひはるい
えありてはのしんま牛といひまねい推
ふもる人々は標もあつたはひうらよ金の
ふしをくくつてねら文字子のたゝと頭とかい
ねら祥氏の字ひと暇とらうとらうと妻よと
りしあつては希有のおのこふありきりか
り色のあつてはふとまて博奕のはのくとい
らうと金子のふ帯とあつたりあつたは
筆とねらふにほつて西のは一はつたは
とねら此の人のあつては中よあるおも
ららに

推^{サコ}魚^コを^ノ標^トとらうとく本松と帯とくくし
とく^サらふん^シは^シの^ノ境^ノ界^ノあつたは
推^サの^ノ標^トとらうとく^サらふん^シの^ノ境^ノ界^ノ
とねら^サの^ノ標^トとらうとく^サらふん^シの^ノ境^ノ界^ノ
とねら^サの^ノ標^トとらうとく^サらふん^シの^ノ境^ノ界^ノ
とねら^サの^ノ標^トとらうとく^サらふん^シの^ノ境^ノ界^ノ
とねら^サの^ノ標^トとらうとく^サらふん^シの^ノ境^ノ界^ノ
とねら^サの^ノ標^トとらうとく^サらふん^シの^ノ境^ノ界^ノ
とねら^サの^ノ標^トとらうとく^サらふん^シの^ノ境^ノ界^ノ
とねら^サの^ノ標^トとらうとく^サらふん^シの^ノ境^ノ界^ノ
とねら^サの^ノ標^トとらうとく^サらふん^シの^ノ境^ノ界^ノ

しつこくしつとらとぬるの威ねより此道にまじりてふ
のちありきとていひてはまじりていへばつのも
いへばつともては知明了の人とあはしめ人の威
光ねとらとていふより深まはれ人の體相とていへば
知高とるよりまじり深まりの人の文字といひて事所
も^{いへば}止むんよとていへばつては依るんをまじりてい
他と不其の風顛倒とやりてまじりてかていふよ
人よりまじりて深まらぬの口とていへばつていへば
のまじりていへばつてはつていへばつていへば
まじりていへばつていへばつていへばつていへば

仲家の法とよのき儒者儒門の即ちまじりていへば
信者のかとていへばつていへばつていへばつていへば
まじりていへばつていへばつていへばつていへば
のまじりていへばつていへばつていへばつていへば
まじりていへばつていへばつていへばつていへば

れ云け両讃ハ字子負ノニ子ヨリ前分ハ我曹下ノ詞ヲ移シ
後分ハ文軒ノ名ヨリ讚ス去レハ此讚ノ及先端ニ由リテ詞
ノ若輩ナルヨリ高ク儒仏ノ至論ヲキル例ニ此讚ノ筆格
ヨリ例ニ庶幾ノ自在ヲ見止シ或ハ閑守ニ船頭ノ一對ハ

西行二天毫ノ件ト知ルレシ或ハ滅明和尙トハルコトモ付人ノ説ヲ
見テハ鉢坊ノ如ク思ハレシニ和尙ニマハ勿射ラズニ足ラズ其ノ
文法ニシテ他ノ凡ハナルヤカトノ事我モ滅明モ家説レテ又
アリ然レハ此ハ偏ニ抑揚ノ法トハ結語ニ同ニヤク人ヲラントハ
世情ノ讚談ニ及ハサレ謂テラレモモ此讚ノ原書ヲ見レハ先師
己各ノ其ミナハ惟然ト同年ノ作ナレシ但レ惟然ハ夏懐
奉生ナリ

蚊柱自護

吾其角

蚊柱のしらばあめくひりかひり
むらぶらぶらのほねを過ぎりて現在よりか

け末末とろりし暑卿よききりかひりかひり
はらりとさるあきり

狂云此一羣ハ懐ノ東羽草ニ在リテ屏凡ニ自筆ノ色神
然ラ四ノ題各ヲ加ヘテ例ニ選場ノ洵色トナレリ去レハ
定テ永郷ノ春ノ夜ノ空ノ浮橋トスレテ峯ニ別ニ揮
雲ノラウトハ無心所着ノ所ニシテ此郷ノ風格ハ千吟万詠モ
此体ニラテ吾子モ一生ノ美ヲマシリ故ニ彼レ他諸ニ世ノ身ニ
落サルモ教多アリテ自レ辞世ノ句ニ至リテハ骨ノ脱近シ
キリクストスルハ春ノ曉ニ秋ヲ思イ寄セタル誠ニ令後ノ哀
事末ノ末末トハ是ヲ云レシ但レ其角ハ武陵ニ遊放スル吾子ハ
彼レ體

本明之盛

一部を和音の法語とせしむるはれりや。神應は法師の
 一部より諸おの人此やとくそとらへて例よ。兼好のや
 情の抑揚、寝姿とらへてさかた字の西のやとらへて
 おとらへて文に不到のあつて馬人無我の口とらへて
 自己のそととらへてあつて一はとく。証の證とらへ
 たらへて好色の段と證してをを洋よめむ。一はとらへ
 たらへて義徳とらへてむねとす。世のなれあつて言と兼好
 の言法して来らぬとらへてとらへてあつて或ら、月とと
 へたりとらへて或は是非よ喜怒のうらみと或は賊力よ
 儒仁のさういひし所を長衣の一段よ人よ大教とらへて

はは、好色のそととらへて一部に趣意と一串よ、所か
 て詞をむる此風流よあつても心を儒仁のや
 かまらうとらへて究竟理節のやまよとらへて和笑のそと
 と證とらへて證とらへてや

ね云此證ハ徒然社ノ大意ニシテ文章ノ鼓舞ヲ用フ
 實ニ其證ヲ證スト云へしまし、面白良基公トハ觀應ノ
 比ノ様相ニシテ伊予入通ト云つて俊なり、次ニ為辨初ハ
 故禪園ノ南書トヤ、兼冬公ノ真書ニシテ云文正一年ト
 あり、云ハ後花園ノ所時ナルニをモ此抄ハ書中ニテ
 善ク傳ヘスト又一ナリ、或ハ公賢ノ蘭本ノ磨ハ全部有

ノ史書ナリトフ其世ニ故アリテ減板ナリト其向ニ魚野ノ
古史跡ヲ載スルニ延慶ノ始ヨリ應安ノ末ニテニ惣テハ
四十年段ハヤリトフ然レハ此護ノ趣ハ徒然ノ護ノ年ニテ
又テ其段ノ下ニ魚野ニテ

銘類

花桶銘

離立甫

心ニシテ一ツの心と云ふもれを口の中ニシテ心の中ニ
の心も一ツの心と云ふもれを口の中ニシテ心の中ニ
心ノ流カス様ノ心と云ふもれを口の中ニシテ心の中ニ
心ノ流カス様ノ心と云ふもれを口の中ニシテ心の中ニ

花桶記ナリト或人ノ合傳ニテ其桶名ヲ
言野ノト云ハシマ然レテ中則ニ有ク名ヲ置テ前後ハ
序詞ノ筆格ニヨリ又ハ銘ノ一字ニ題アリ但し此作有ハ
申比ノ御土ニシテ離トハ此ノ家名トフ

抑々本銘

藤知行

花桶記ナリト或人ノ合傳ニテ其桶名ヲ
言野ノト云ハシマ然レテ中則ニ有ク名ヲ置テ前後ハ
序詞ノ筆格ニヨリ又ハ銘ノ一字ニ題アリ但し此作有ハ
申比ノ御土ニシテ離トハ此ノ家名トフ

大明文鏡

のまのしとちげんらん 唐三子のまのしとちげんらん
カラン
芥子のまのしとちげんらん 唐三子のまのしとちげんらん
ふらふらふらふらふらふらふらふらふらふらふらふらふら
比のいれいれいれいれいれいれいれいれいれいれいれいれ
おのろいれいれいれいれいれいれいれいれいれいれいれいれ
鉄丁のまのしとちげんらん 唐三子のまのしとちげんらん
あつらひ大根をらんらんらんらんらんらんらんらんらんらん
起してらんらんらんらんらんらんらんらんらんらんらんらん
いれいれいれいれいれいれいれいれいれいれいれいれいれ
のまのしとちげんらん 唐三子のまのしとちげんらん

らんらんらんらんらんらんらんらんらんらんらんらんらんらん
跡男跡女のまのしとちげんらん 唐三子のまのしとちげんらん
今午より江戸の宿と宿舎のまのしとちげんらん 唐三子のまのしとちげんらん
のまのしとちげんらん 唐三子のまのしとちげんらん
よのろいれいれいれいれいれいれいれいれいれいれいれいれ

らんらんらんらんらんらんらんらんらんらんらんらんらんらん

らんらんらんらんらんらんらんらんらんらんらんらんらんらん

ねんじ銘ハ比体ナリ奉ヨリ知行ハ美濃ノ産シテ且舞ハ近藤
ナリナカ武名ヲ辞シテ漂流セシヨリ多ニ奈端ノ詞ヲ知ルニ
知レバ此のまのしとちげんらん 唐三子のまのしとちげんらん

トナリ去リ世向ノ議ニ或ハ南禅寺モ水車寺トモ大徳寺ノ
松詞ナルヲ今ハ十棒ノ起語トナリ削ニ削語ノ半倍ヲ得
蕉門ニ此作者アリト云ハシ況ヤ具銘ノ洒落ナル漫ニ東山
詩風ヲ傳ヘテ爰ニ銘也ノ曉ラ云ルナリ

著者銘 昇序

西華坊

兼里ノ物ニ此師ありて師に奉る爲ニ此詩をばら
兼里ノ風流ニ此師ありて師に奉る爲ニ此詩をばら
ト云ハレセシ人老シてあはひあはしくハ此詩をばら
ト云ハレセシ人老シてあはひあはしくハ此詩をばら

兼里ノ物ニ此師ありて師に奉る爲ニ此詩をばら
兼里ノ風流ニ此師ありて師に奉る爲ニ此詩をばら
ト云ハレセシ人老シてあはひあはしくハ此詩をばら
ト云ハレセシ人老シてあはひあはしくハ此詩をばら

兼里ノ物ニ此師ありて師に奉る爲ニ此詩をばら
兼里ノ風流ニ此師ありて師に奉る爲ニ此詩をばら
ト云ハレセシ人老シてあはひあはしくハ此詩をばら
ト云ハレセシ人老シてあはひあはしくハ此詩をばら

ね云北銘ハ高錫ノ陋室ニ效テテモハ句ニシテハ約ナリ但シ
著ハ柄ノ五文字ハフタト云キ花十六例ニ全語ノテ捨テ之
次ニ言師以下ノ句ハ亦モ四句ニシテ二句ノ意ナリハ是モ高錫カ
山水ノ四句ヲ以テ二句ノ意ナリニ效ヘリ次ニ然ラハトは辭ヲ
置テ是ヲ約外ノ踏語トセシハ是モ高錫カ七字ノ結語
ニシテ總テハ長短ノ句法ヲ用クニ和漢ニ通用ノ文體ナ
一字ノ私ナキヲ見ルニ去トハ其銘ノ二人トハ外面ハ著ハ柄ノ五
ニ言セテ獨食應ニ呼ル縁語ナカラ兩師ハ同時ノ名ニ呼ビテ
其日ノ崇敬ラムルナラシテ増シテ松竹ノ對ナト云人ト遊ハル
ハ流ナカラる君心ハ分明ニ是ヲ踏語ノ言法ト稱スル

誠ニ一篇ノ揖讓コリ師才ノ實訓ヲ感スニキヤ但シ其
ハ大鳴氏ニシテ浦ノ倉敷ノ壘ナリトク
旅祝銘
相左角

コト云ハた此の氣と觀一トビニ云々云々云々云々
子ノ極虎の勢と云フ一トカノ味けを以て云ト

是汝
云々云々云々云々
云々云々云々云々

ね云北銘モ但シ一体ナリ筆墨ノ二子ニ龍虎ノ客ニ
寄セテ月花ノ一對ハ旅ノ以情ト見ルニ然ルニ序詞ノ

西向二約ナシラ後ノ銘語ニ云クツクニタニ世ノモ希年約
ニシテ法格ハ千重ニ口能ナシカ

古鏡銘 并序

古鏡銘

け家ニ現ありけの現を大石内蔵におぼくし據
の人北おぼくして其の據をよむるをふりて現
のち一の武印と云ふ今北世の鏡よりてをよみて
とておぼくしてはとてはとてはとてはとてはと
又ふりてはとてはとてはとてはとてはとてはと
朝若とてはとてはとてはとてはとてはとてはと

麾下北の十余人もかちくを武の其の角の風和とけ
とみく文武多しとてはとてはとてはとてはと
とてはとてはとてはとてはとてはとてはと
現の今北よりてはとてはとてはとてはと
とてはとてはとてはとてはとてはとてはと
て之の國の浦の月よあらくつてはとてはと
つてはとてはとてはとてはとてはとてはと

現をむき北つてはとてはとてはとてはと
いふく。現をむき北つてはとてはとてはと
むき北つてはとてはとてはとてはとてはと

申たしに筆のよあねのこふれあひて次の海は
あひさるるを仰。あつと古知のあつと古知
熱海の波とわく忠義の人此きくくく
あつと古知を仰。あつと古知を仰。あつと古知を仰。
の舟くくく心。

任云世銘モ長短ノ句法ナカラ五章ニシテ十ニ句ハ中ニ章
ハ六句ニシテ二韻ナリ是ヲ青尾ノ約ノ定法ト云フシ前ニハ
著銘銘ニ古法ヲ守リ又ニハ古硯銘ニ新格ヲ用イタル
此等ニ又鑑ノ公論ヲ知ルレ但し世題ハ唐子西カ銘ニ
效ル彼カ銘ハ六句ニモむも六韻ノ論ハ有十カラ例ニ

漢約ノ所法ハ東ナシ去ハ君舟臣水ハ貞觀政要ノ詞
ヨリ總テ文武ノ兩用ヲ云ルニ花ノ木陰ハ忠度ノ事ヲ含
馬上ノ利ホホハ曹操ノ詩ヲ寄セテ和漢ノ文武ニ和漢ノ詩ヲ
ヲ對セル誠ニ文筆ノ神ニシテ博知ノ自在ニ致馬久シ然ルニ
大石ヤ忠節ハ文苑武林ニ名ヲ稱シテ古今事例ノ武士ハ
或ハ生前ノ文書ヲ尋子或ハ死後ノ調度ヲ求テ心アル人
ハ秘蔵セリトフ但し播東ハ之國ニ佳ス素生ハ播州ノ人ナリ

不血銘

信よる

ひとしつり二月をくぬあふとのしるる地くら

何れを全十お八あんとや。

ね云地銘ハ短簡ニシテ韻ヲ用ヒテ奇法アリまは古今ノ詞ヲ
借ツテ今人ノ語ニ取合ヒタレハむモ一季ノ句ニ似テ二句
ニ韻ナルヲ止レシ況ヤ月花ニ登夜ヲ對ヒル有述ニ自任
ノ人ナルヲマ多ニ合ナ在ハトハ世ニ不血ノ語ニ合ハナクハ
盛ルク夜ハ八分ニト云ハナリ他ニ世余ノ銘類モ條朝ニ
菅ニ只以紀納言ナト種々ノ體格ヲ見合スレ

...

本邦文鑑才九

日記類

芭蕉公御終事記

庚午紀行

自造終事記

碑文類

熊文林寺假名碑銘

園司墓誌

弔文類

生身急案文

弔許文

本邦文鑑九

Handwritten text in a cursive script, enclosed in a rectangular border. The text is written from right to left across ten lines. The characters are dark and fluid, typical of a historical cursive style.

Handwritten text in a cursive script, enclosed in a rectangular border. The text is written from right to left across ten lines. The characters are dark and fluid, typical of a historical cursive style.

ひさし長桂よあはれあ人の世にまがらふて
川船よのふあはらるるにきこひしあはれあ人の世にまがらふて
東の神くむし龍雲うたあはれしこきさうあは
雲原とけよあはれあ人の世にまがらふて
あはれあ人の世にまがらふて
あはれあ人の世にまがらふて
あはれあ人の世にまがらふて
あはれあ人の世にまがらふて
あはれあ人の世にまがらふて
あはれあ人の世にまがらふて
あはれあ人の世にまがらふて
あはれあ人の世にまがらふて

あはれあ人の世にまがらふて
あはれあ人の世にまがらふて
あはれあ人の世にまがらふて
あはれあ人の世にまがらふて
あはれあ人の世にまがらふて
あはれあ人の世にまがらふて
あはれあ人の世にまがらふて
あはれあ人の世にまがらふて
あはれあ人の世にまがらふて
あはれあ人の世にまがらふて
あはれあ人の世にまがらふて
あはれあ人の世にまがらふて
あはれあ人の世にまがらふて
あはれあ人の世にまがらふて
あはれあ人の世にまがらふて
あはれあ人の世にまがらふて
あはれあ人の世にまがらふて
あはれあ人の世にまがらふて
あはれあ人の世にまがらふて
あはれあ人の世にまがらふて
あはれあ人の世にまがらふて

あつとや、樵路の麻田家の書として湖上の力に映し
けふふの風をよめあれ、遺書も亦くいづれに
けふふの風をよめあれ、遺書も亦くいづれに
けふふの風をよめあれ、遺書も亦くいづれに
けふふの風をよめあれ、遺書も亦くいづれに
けふふの風をよめあれ、遺書も亦くいづれに
けふふの風をよめあれ、遺書も亦くいづれに
けふふの風をよめあれ、遺書も亦くいづれに
けふふの風をよめあれ、遺書も亦くいづれに
けふふの風をよめあれ、遺書も亦くいづれに

身ニ行ハ俳諧ノ洒落ヲ意ニホメル其師ノ本懐ヲ尽サス
ト云々又ナク其師ノ遺筆ヲ傳ヘスト云々又ナシ誠ニ世道
其云羽アリテ且云羽ニ付テ房子アムラヤ或ハ能因孟^ト裁
イサヤト幻ニ誘ヒヌラニ終末ノ文ノ奇絶ニシテ眠ルヲ明ル
息々又ハ終末ノ詞ノ文鑑ト云ニシ増シテ舟ノ夜ノ哀ナル
落月ノ霜モ其後ノ明カナラシカ然ルヲ世記ノ遺書ト云ハ
湖上ノ風景ヲ朝之別ニ寄セテ寂室和尙ノ風流ヨリ也月モ
清カラント結語セル筆陣ニ風雅ノ眼アリテ古本ヲ換筆
ニモ記セサル所ナラシハ又ニ落子カ筆カヲ知リテ我門ニ
付作者アリト感スヘシ但シ世記ハ元禄甲戌ノ冬ナリ

大月文鑑

庚午紀行

白四雄防

百骸九竅の中は物ありかりしはあつてはるべし
ふは海にうきもれし舟は破れやとよき舟のつら
ふもやあじ彼をね白とよみしうひもくはよと
のうらむしありてあり時、倦んて放擲せしむ
あつてはるべし人よかへんもとらふたのし非や胸
中よせしうらてりうわよわらうしとあつてはる
はるしとねんしとさうのしとわはしてしと
はるしとねんしとさうのしとわはしてしと

和歌よおける宗祇の連なりあくる雪舟の擧げ
利休の茶事よおけるその世らんとるおしありし
の雅おとらるるは造化のしとてはるしとらんと
らんちもむとあはれしとらむしとあつてはるし
ふもあつてはるしとあはれしとらむしとあつて
そのふのしとあつてはるしとあはれしとらむし
あつてはるしとあはれしとらむしとあつてはる
とありしとてはるしとあはれしとらむしとあつ
めと凡そおのちよあはれしとらむしとあつて
旅人よ和名にうれん神にうれ

ある人かはなうみやうまひいふもふかしあひかゝりし事の事
 といひてこの月の糧とあつちさつ女のりしと
 りねと我の綿つあつしあの糧よりつちさつあ
 ちさつとちさつちさついしてちさつあの事を言ひつちさつ
 あつちさつあの糧よりちさつあの事を言ひつちさつあの事を言ひ
 ちさつあの糧よりちさつあの事を言ひつちさつあの事を言ひ
 の首を通しつちさつあの事を言ひつちさつあの事を言ひ
 道記とつちさつあの事を言ひつちさつあの事を言ひ
 わつちさつあの事を言ひつちさつあの事を言ひ
 てはの糟粕とあつちさつあの事を言ひつちさつあの事を言ひ

後加

短才のつちさつあの事を言ひつちさつあの事を言ひ
 賤てたつちさつあの事を言ひつちさつあの事を言ひ
 おちさつあの事を言ひつちさつあの事を言ひ
 つちさつあの事を言ひつちさつあの事を言ひ
 つちさつあの事を言ひつちさつあの事を言ひ
 とありつちさつあの事を言ひつちさつあの事を言ひ
 ちさつあの事を言ひつちさつあの事を言ひ
 の謙言はつちさつあの事を言ひつちさつあの事を言ひ
 のみちつちさつあの事を言ひつちさつあの事を言ひ
 ちさつあの事を言ひつちさつあの事を言ひ

ていふも又濃尾強のりよまかていふ

味わくしんくやほせの聲しんく

と花より千里の山よなまきうしむくもまをよりぞ
とよりありぬぬの里よ馬かしてなつとぬのちりや
為難うらうりてりるるるる

よかりあふなつよ坂とる馬うま

ちうし花あやうがくらなれと後よまの詞しんく
よんるよぬ難の向よまうくうなれより伴あまの古里よ
るよ難とていふ

花の山よなまきうしむくもまをよりぞ

まよまきうしむくもまをよりぞ
花の山よなまきうしむくもまをよりぞ
あこれよしんくやほせの聲しんく
るよ難とていふ
花の山よなまきうしむくもまをよりぞ
とよりありぬぬの里よ馬かしてなつとぬのちりや
為難うらうりてりるるるる

乾坤中を行同行二人

一即しく標にちうを梅あひま

言ふまうとれんまの梅あひま

四羅坊

玄第九

世よりお養頭の時とやんくお東の向はをばらわらふに

お妻のきこわれあはれにけりて旅のやせあはれに

るのあはれにけりておまのいねいねおのけ

とほろちふく改まらばおまのいねいねおのけ

てなまのくちまのいねいねおのけ

おまのいねいねおのけ

おまのいねいねおのけ

おまのいねいねおのけ

おまのいねいねおのけ

高野寺

おまのいねいねおのけ

おまのいねいねおのけ

おまのいねいねおのけ

おまのいねいねおのけ

おまのいねいねおのけ

おまのいねいねおのけ

おまのいねいねおのけ

おまのいねいねおのけ

高野寺

おまのいねいねおのけ

平本記元禄ノ使年ナラシカ四ニ傳ルモ多クレ或レ元紀行

トモ云ル其紀ハ貞子ノ執ルレ去ルヲ以テ芭蕉ニ庵ニテ

紀行ヲ取捨シ玉元禄ノ年未ト見タレハ兩紀ノ文法ヲ取
合セテ此篇ヲ成セリト見ユモ故有ノ旨捨シテ文章ノ故
ニ幻住庵ノ脚ト記上ニ之通ノ遠クハ知ラズ度モ取捨シ
玉元禄人ハ秘蔵シテ各傳ス故ナリ見ル人ハ亦モ点檢
玉レハ紀行ノ宛藤ナル是ラ詩考ノ人モ抄シ是ラ連他ノ人
レ

字ニ云ルハ芳野ノ花ニ至リテ一唱一和ノ作ヲナクス面ニ面ノ二ニ

筆ヲ絶タレ是ラ又五早ノ虚實ニシテ是ラ又五早ノ起結ト

云ハスヤむモ鉄師ノ碑文ニモ此等ノ團スヲ云ルヲ或ハ名所

ニ雜ノ句ノ古又ハ蕉内ノ亦同ニ證句アリテ蝸牛ノ句ハ雜体ト

云ル或ハ猿面ノ類ナラシク傳但レ世記ニ用ル所ノ故夏古語

ナト數多ク中ニ芳野ニ接章ノ二字ハ誰ニカラン知ヌ

或ハ早ト各タルモアリモ詩カキノ作者ナラシカレハ世記

ノ結文ハ蝸牛ノ句ニ合捨テ其終リヲ調ハルモ先ハ紀行

ノ様ナカラズヤ子ト垂解ノ事イラ高サニ海申六十州

榮落ヨリ人向一西ノ夢ヲ幻ヲ觀シタル例ニハ備ノ骨節

長月文盛

十二

近々紀行ノ文鑑ト見レシ去ハ社國ハ故前ノ愛才ト云キ幸
短命ノ歎アリト故前ノ良友ト云キ命ト云キ素生ハ尾城ノ令
トフ但シ世ハ命ニ同羅難坊ト故前ノ固ノ狂人ト云キ其後モ
世ノ

自造終末記

東大寺坊

今年ハ宿願永幸知の杖ありたりホシ坊と云キ終末の
記と成りたりト云キと持て任せて世に在り月十六日也
世ノ容あり名ありたりありたり容多ク世ト云
ト云キ併し世ノ世と云キ世ノ世と云キ世ノ世と云キ
ト云キ世ノ世と云キ世ノ世と云キ世ノ世と云キ

蓮磨ハ少林寺ノ跡と云キ一ト葛山頂ノ頂ノ跡と
云キ行園ノ一首の事ト云キ一ト死て世の魂の
かたも云キ世ノ世と云キ世ノ世と云キ世ノ世と云キ
生身トモ権者の不思議ト云キ一ト世ノ世と云キ
の坐脱立上ト云キ一ト世ノ世と云キ世ノ世と云キ
も世ノ世ト云キ一ト世ノ世と云キ世ノ世と云キ
善化ト云キ一ト世ノ世と云キ世ノ世と云キ世ノ世と云キ
死ト云キ世ノ世と云キ一ト世ノ世と云キ世ノ世と云キ
生身の事ト云キ一ト世ノ世と云キ世ノ世と云キ世ノ世と云キ

文鑑文鑑

一かよのちやわらわとよみかむるなるにたれはあはれみよ
とありてはしはゆきくさるるにてははらへりてははらへり
碓の神もはもとてかたきよとありてははらへりてははらへり
の二に三舞に切名の向てすとまうりて西施と五柳とありて
くんと九とひかひりてははらへりてははらへり
曹と九丘とありてははらへりてははらへり
老のふけははらへりてははらへり
やふてははらへりてははらへり
孫とありてははらへり
ころとありてははらへり

とありてははらへりてははらへり
ころとありてははらへり
孫とありてははらへり
やふてははらへり
老のふけははらへり
曹と九丘とありてははらへり
くんと九とひかひりてははらへり
碓の神もはもとてかたきよとありてははらへり
とありてはしはゆきくさるるにてははらへり
一かよのちやわらわとよみかむるなるにたれはあはれみよ

あふふいときみしにけりかきつるのりかきつるのり
そし年々水の東流して驚く老のやうなるもの
これら先づは儒書の改ざるとしてけりかきつるのり
わらふあふふ世のまことなりすはいふとけりかきつるのり
くは説くはに知をいひて二かたをいふて凡そ人情の
二論より新古の差別とありしうの佛と極ありてけり
論ありしうの論を自他の好悪とありしうの
世の字通しし口といひしうの比の字なるといひて
きしゆ子のあふふしうのしうのしうのしうのしうの
かゝるのしうのしうのしうのしうのしうのしうのしうの

才よとあひるるものあふふも物よとえはの序何ん
右今よるのしうのしうのしうのしうのしうのしうの
二月十二日の洛のぬれ書し無名の碑とてしうのしうの
書のしうのしうのしうのしうのしうのしうのしうの
あふふしうのしうのしうのしうのしうのしうのしうの
しうのしうのしうのしうのしうのしうのしうのしうの
濟江の書変化をいひてけりかきつるのり
とてしうのしうのしうのしうのしうのしうのしうの
西華塔もあふふ獅子庵もあふふ野盤子もあふふ能書
よけりかきつるのりかきつるのりかきつるのり

なりあつたしとあつた非もあつたといふは、
うま秋のけねのそやあつた秋の上るよのそやあつたが
のれのおれくといふの月をいふのそくといふなり

紀元世記の在周カ齊物ヲ類レテ題名ハ但しヨ備中ノ詞ナリ
去ルハ起ニ客名ニヨリヨリ客アリテ各ナキ物トハ是ヲ終ニ
志トシテ有ルハハラス即破スレ去レハ一編ノ故更古語ニ
例ニ和漢ノ自在ナカクヲ意ノ對テ新詩ナラヨリ花鳥ニ
雲水ノ對ハ誠ニ世々而ノ骨ノ節ニシテ我師ノ本情ハ二句
ニ見徹スレ或ハ水ノ蛙トハ在中將ナキアリテ立論ノ名ナキ
ヲ西行ノ考ト取合セタル是モ又肉ノ法トヤムハ増シテヤ馬ニ

佳格ノ古考ヲウケ任格ニ和考ノ各同ヲウケ全ク又肉ノ
文法ト知ルレシ或ハ古鳥ノ言ノ句評トハ我師ニ及我格ノ故アリテ
湖南ニ曲調ヲ身ノ夜話ナルヨシ先ニ陳情、表ニ世古アリ或ハ
芳野山ノ句トハ使實紀行ノ世古野部ニハ、イ考書ヨリモ軍書
ニ悲シク芳野山ト云ル我師ノ雜ノ句ニ隱士和山ト雜陳ノ詞
テ故云雨ニ芳野ノ及先句ナキ故テ明セリ或ハ風琴ノ情ノ論先
ニ古書ノ松空ヲ撰シテ後ニ續五論ノ拾遺アリ惣ニ雜語ノ
理論ナリ或ハ今ノ上二經トハ我師ノ在互條ヲ註シテ一句ニ六句
ノ姿情ヲ附ケテユハ卷ラ一考仙ニ陶合セタル八段ノ變化ヲ
云ハナリ但し獅子庵ノ遺稿ニ在リテ書肆ニ山ナス然レハ一編

結文三 諸法皆空人所ヨリ取ニ杖ノ色ヲトメ耳ニ秋ノ音ヲ
 残セル是ヲ仰教ノ生感自在と云クテ是ヲ文通ノ死活自在ト
 云レ但シ結語ハ人凡ノ身ヲカラテ世ノ詞ヲ借ルル也

碑文類

芭蕉翁石碑銘

并序

東華坊

我師ハ伊豆の國ニシテれて兼應の比トテ藤堂の東
 山に於てのえらと杭比の臺トテ也今の代を松尾
 ありりり年々しく甲午のえとやしてさす武陵の澤川
 世とのれてせよ芭蕉翁の庵のゑと人のりてて
 ぎうるゑる一るらにとて今頃の事比とて

此語をあきひてり師の役とわびとてふ一はれら
 ね流のりあめじよふいふ象はなゆめ命のあふ
 こし言ふとてあめらよとて一はる一子此作
 こちとけらてつととてつとつとつとつとつと
 此をの枯られて難波の浦よ世とてんをてるい子此を
 邪や月の年の三つありりちるとつとつとつと
 けのえととてつとつとつとつとつとつとつと
 のんをたつとつとつとつとつとつとつとつと
 こつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと
 んとつとつとつとつとつとつとつとつとつと

本朝文類

...

其銘

あつこい	武さうの国此	ふりしあふ。
あつこい	あつこい	ふりしあふに
あつこい	言のまかり	あつこい
あつこい	みふかしの	あつこい
あつこい	あつこい	あつこい
あつこい	あつこい	あつこい
あつこい	あつこい	あつこい
あつこい	あつこい	あつこい
あつこい	あつこい	あつこい
あつこい	あつこい	あつこい

碑陰

維石不言
謎文以傳

とく	とく	とく
とく	とく	とく
とく	とく	とく
とく	とく	とく
とく	とく	とく
とく	とく	とく
とく	とく	とく
とく	とく	とく
とく	とく	とく
とく	とく	とく

狂云此碑ハ洛東ノ舞女村寺ニ在リテ頓向西行ノ墓ニナラリ
但シ本朝ニ假名ノ碑ノ始ナラシカ其年ハ寶永庚寅ノ春ナリ
去ル此銘ハ三十一句アリテ起結ニ假名ノ韻ヲ用ルニ中間ノ
此ニ句ハ七字ノ謎ニシテ其三句ニ毛首尾ノ韻アリ然レハ

本朝文盛

人におられぬものありては、
 ちよと書とありぬものありては、
 世に阿るるものありては、
 ことごとく短くもとむるものありては、
 當分よりあるものありては、
 一ぬらぬものありては、
 死を來てはぬものありては、
 ねん曇詩の文選にモ論ありては、
 類に六軍よりとりては、
 外に詩文より出せりては、

當分ハ子孟遲カ詩ヲ言ヒ花陰ニ西行ノ奇ヲ摘ミテ西ニ唐堂
 カ鳥ハ頓挫ノ格ト云ヒ何モ其字ノ口授アリテ故公翁ハ及文字ニ
 世論アリ但し圖司ハ其姓ニテ各ハ呂カカニ出州國ノ御侍
 弔文類
 生身魂祭文
 北七里

ひとと維波のまこととていせのほろけとやい
 今とそこの浦のに鮮とていひて二んめ美走とてい
 あうとてそれと世の人をみるもいふとていふ
 唐公とていふも名者といふもいふもいふも
 ちよと書とありぬものありては、

本用文類

いふ所の二物多るあつて其あふさびく其さるらるる
さうと云ふ事いふや鯉のふいひふて一かこのの龍に
そのさるの何んさる人のさるさるわらへや彼も一
師ありて其さるとさるあふさふさふらへやあつて目
もさるのさるのさるさるとさつて一碗のさるさると通
りてさる二子の固さるとさるりててい子金のさるとさ
らねてさるの刺^{サレサハ}精さるとさるて雅^ヤはさるに斬のさるとさ
みあふ伴^ハ坊^ハのさるさるのさるとさふさる鯉のさるさるさ
るさる龍とみさると供物とさるとさるせさるさる
^{ニツハキ}龍虎子の枝とさるりて一瀧の水とさるくさるの西南

さるのさるりて強^{ヒコ}さるのさるさるさるりてさる
さるの風あれて二麻木のさるさるりて二虎さると吹
らるとさるりてありやさる

ね云世々文^ハ比^ハ体^ニて中^ニ両箇ノ隠者アリ早^ニ竟^ハ伴^ハ勢^カ
ノ固^ニ龍ノさるとさる^ハ謂^{ナリ}去^レハ其^ハ魚ノ多^ク名^ナル
言^ハ秋ノ二子^ニ詔^ヲ起^シテ古^キま^ラ用^ルニ自^在ノ所^ナラン或^ハ
鯉ノさる^ハ虎^ハサ^ハ越^後路^ノ遠^ニ教^多かり^テ室^可鯉ノ吊^ヒ
ト^ハ或^ハ弘^マ皮^モ越^後ノ高^山ナリ然^ルニ二子^ノ師^ト云^ハ先^ニ
彼^ハ鑑^亭ニ^テ我^師ト^シ吟^ノ奇^仙ニ^同作^ノ花^ニ本^{アリ}
二句^同意^ノ秘^授あり^テ其^ハ花^ヲ指^シテ一^子ト^ハ云^ハ元^ヲシ

本明文編

じもいふ偏ハ一語誑ナレニ似々ト云々三子ノ困ラシメテハ判斷
寄リテハ生見魂ノ意ヲ猶ヒ録ク幸免ハシメテハ全クノ題ヲ
頭ハ誠ニ七縦八横ノ体ナリ但シ此段ハ我師ノ名ヲ即破

弔許六文

渡部 ね

仁志の許六と云雅と大剛の男と云々其等々此語の
旗とひる之と一詞林と云々其の等々此語の
天下の流士と云々此語の等々此語の
黙心石附の大將と云々此語の等々此語の
云々此語の等々此語の等々此語の

終にカキテ云々此語の等々此語の
何と云々此語の等々此語の
あついで此語の等々此語の
ききも此語の等々此語の
あついで云々此語の等々此語の
武花と云々此語の等々此語の
手印觀の本由と云々此語の等々此語の
あついで云々此語の等々此語の
洛陽と云々此語の等々此語の
あついで云々此語の等々此語の

大明文鑑

二喃一汝ハ陶昂カ胡床ノ疾ヲ歎ク總シハ文武ノノ能ヲ林ノ
是ヲ一々ノ極意ト成セル非心非仰ハ斯又ノ忠告ト知
ルレシ去レハ文選ノ異論ハ才一文章ノ虚實ヨリ或ハ假名員名
ノ配リヲ云イ或ハ句讀ノ長短ヲ云イ或ハ和漢ノ法格ヲ云イ或ハ
韵字ノ反互攝ヲ云イ或ハ辭類ノ差イヲ云イ或ハ文類ノ誤リヲ
云イ或ハ列傳ニ人ノ褒貶ヲ云ル總シテ書面ノ體合ニ本ヨリ
我家ノ通ヲイラヌル其ノ争ニ向テ推テラシム人ハ致亡虫也例シテ
而世ニ又互字ノ法格ヲ知ス知テ用イケル時ノ師範タラシ且シ
其人ハ本以門内ニシテ標号ヲ而中ト云イ別ニ性ラ五老井ト云フ
又阿仲ハ法名ナリトフ

古名ノ體格

後序

後五音

古名ノ體格
此らがくのいふとあじけく又體と云ふは教ト七題
とあまをいふ名物と云ふはわがわがのいふ名物の
のいふあては今のいふ事の大綱と云ふはさきと和漢
のいふ體格と云ふは一はくはあはくは句格ありてさき
を讀むもあまのいふ名物と云ふはわがわがのいふ名物の
いふ體格の用と云ふはわがわがのいふ名物のいふ體格
いふは五ヶ條の式用といふ事と云ふはわがわがのいふ名物の

本用文盤

倭人といはるる人の配る奇人連子のみ世といふは軍と
付記の便ありきと神代文の遣ふことよ一いつ
ひの詩といはるる人の配とありてことよ一いつ
文類のやくさしふむと利原の御とありて
み幸の人ははもといふく解と人偏の事早
ては余を所しあしのおやとありてみ幸の人は青
みんとい詩とみ徳の趣いて解とみ徳の意と
よ一いついひの事といはるる神代文の遣ふことよ一いつ
神代文の遣ふことよ一いつ
いひの事といはるる神代文の遣ふことよ一いつ

奉の御奉公の事いかに拾遺集の御奉公の事いかに
あつたはるる御奉公の事いかに拾遺集の御奉公の事
いかに拾遺集の御奉公の事いかに拾遺集の御奉公の事
いかに拾遺集の御奉公の事いかに拾遺集の御奉公の事
いかに拾遺集の御奉公の事いかに拾遺集の御奉公の事
いかに拾遺集の御奉公の事いかに拾遺集の御奉公の事
いかに拾遺集の御奉公の事いかに拾遺集の御奉公の事
いかに拾遺集の御奉公の事いかに拾遺集の御奉公の事
いかに拾遺集の御奉公の事いかに拾遺集の御奉公の事
いかに拾遺集の御奉公の事いかに拾遺集の御奉公の事

心くあらん人らに假らぬふらふらとて
京師の書林よりつよよと新しうに
しとるものと也

享保戊戌其六月上浣

江戸日本橋南二丁目

小川彦九郎

京寺町押小路橘屋

野田治兵衛

書目林

